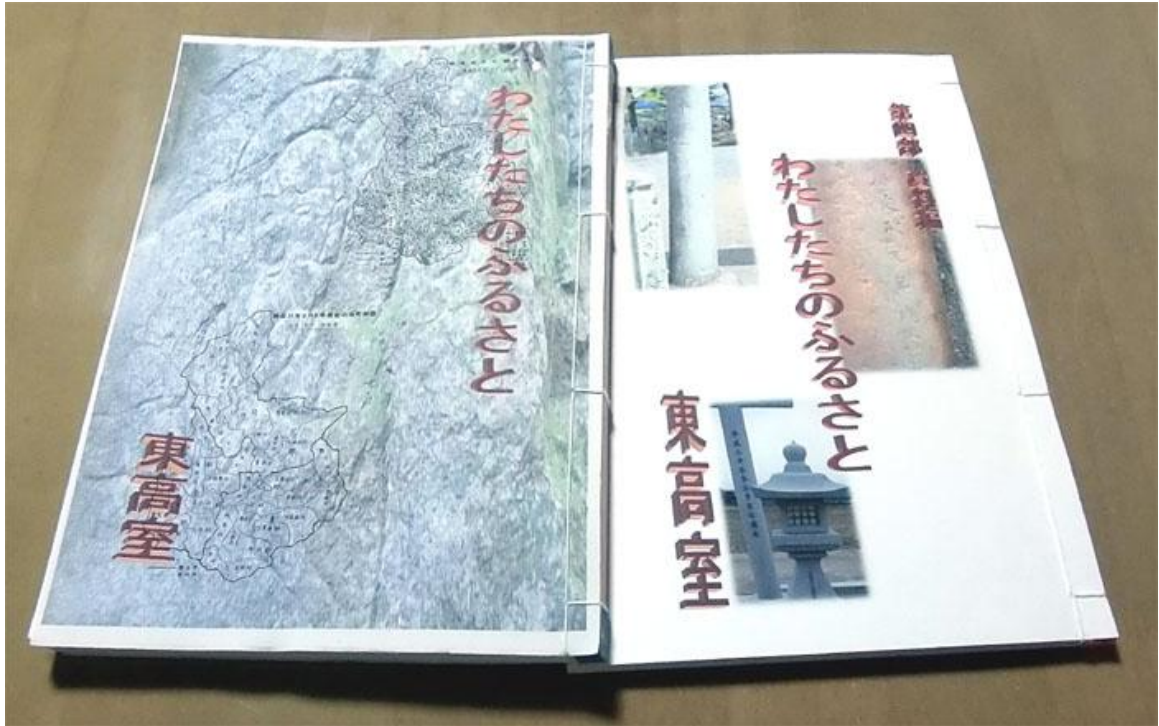


冊子（わたしたちのふるさと 東高室）の作成



この冊子は、上の写真のように二冊にまとめました。

一冊は、三部構成と致しました。

第一部…わたしたちのふるさと東高室

第二部…伝統と文化遺産

第三部…歴史探訪

もう一冊は、

史料・資料

というように分けて作成致しました。

出来るだけ写真や表を多く取り入れました。

字下げとぶら下げ・ルビ・割注

- ◆ 1、字下げとぶら下げ
- 2、ルビ
- 3、割注

歌舞伎が発祥したのは、徳川幕府が開かれた慶長八年（一六〇三）といわれ、その後、十余年の年を経て京の南座他七座がる等々、江戸時代に大成した日本の代表的な演劇です。慶長（一五九六〜一六一五）のころ阿国歌舞伎（江戸時代初期、出雲阿国によって始められた歌舞伎。女性が男装して唱歌にあわせて舞踊を繰り返したもので、女歌舞伎の先をなしたといわれている。）にはじまり、女芝居、若衆歌舞伎（江戸初期、前髪のある少年によって演じられた歌舞伎）を経て、元禄期（一六八八〜一七〇四）に劇的要素を主とする演劇に発展しました。女優の代わりに女形を使い、舞踏劇・音楽劇などの要素を含む演劇、つまり、現在見るような演劇スタイルの男性だけの歌舞伎へと発展していききましたが、絶えず幕府から強い規制を受けていました。



- 1、字下げとぶら下げ

◇一字字下げ

歌舞伎が発祥したのは、徳川幕府が開かれた慶長八年（一六〇三）といわれ、その後、十余年の年を経て京の南座他七座がる等々、江戸時代に大成した日本の代表的な演劇です。

歌舞伎が発祥したのは、徳川幕府が開かれた慶長八年（一六〇三）といわれ、その後、十余年の年を経て京の南座他七座がる等々、江戸時代に大成した日本の代表的な演劇です。

一行目が一字下がる

◇一字ぶら下げ

慶長（一五九六〜一六一五）のころ阿国歌舞伎（江戸時代初期、出雲阿国によって始められた舞踊を繰り返したもので、女歌舞伎の先をなしたといわれている。）にはじまり、女芝居、若衆歌舞伎（江戸初期、前髪のある少年によって演じられた歌舞伎）を経て、元禄期（一六八八〜一七〇四）に劇的要素を主とする演劇に発展しました。

慶長（一五九六〜一六一五）のころ阿国歌舞伎（江戸時代初期、出雲阿国によって始められた舞踊を繰り返したもので、女歌舞伎の先をなしたといわれている。）にはじまり、女芝居、若衆歌舞伎（江戸初期、前髪のある少年によって演じられた歌舞伎）を経て、元禄期（一六八八〜一七〇四）に劇的要素を主とする演劇に発展しました。

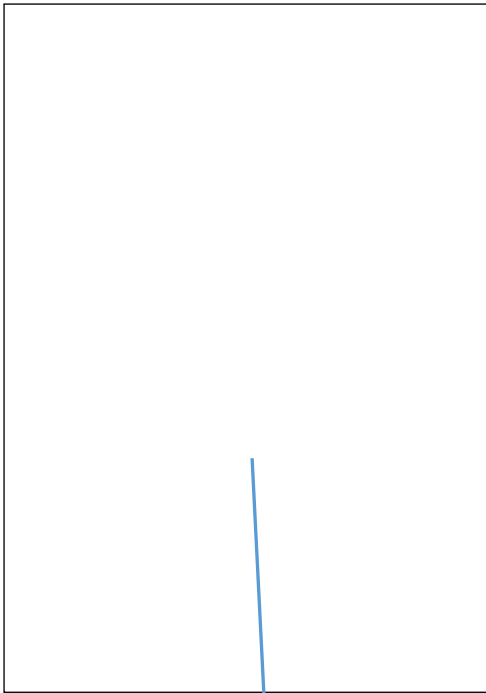
一行目はそのまま
二行目から一字さがる

2、ルビをつけると行間が広がる

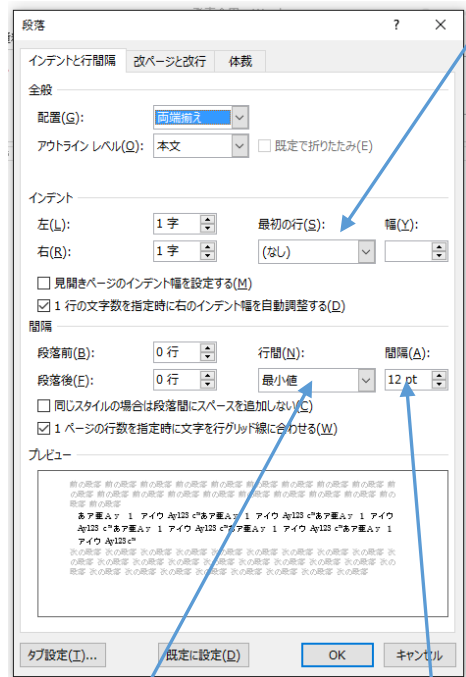
女優の代わりにおやま、舞踏劇・音楽劇などの要素を含む演劇、つまり、現在見るような演劇スタイルの男性だけの歌舞伎へと発展していききましたが、絶えず幕府から強い規制を受けていました。

←

女優の代わりにおやまを使い、舞踏劇・音楽劇などの要素を含む演劇、つまり、現在見るような演劇スタイルの男性だけの歌舞伎へと発展していききましたが、絶えず幕府から強い規制を受けていました。

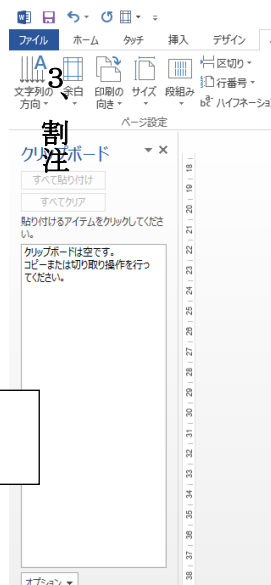


字下げ・ぶら下げ



固定値

間隔



慶長（一五九六〜一六一五）のころ阿国歌舞伎（江戸時代初期、出雲阿国によって始められた歌舞伎。女性が男装して唱歌にあわせて簡単な舞踊を繰り返したものを、女歌舞伎の先をなしといわれている。）にはじまり、女芝居、若衆歌舞伎（江戸初期、前髪のある少年によって演じられた歌舞伎）を経て、元禄期（一六八八〜一七〇四）に劇的要素を主とする演劇に発展しました。

【参考】

◇縦中横

平成28年11月16日

←

平成28年11月16日

◇組文字（最大六文字）

洋友会

←

会 洋友

◇囲い文字

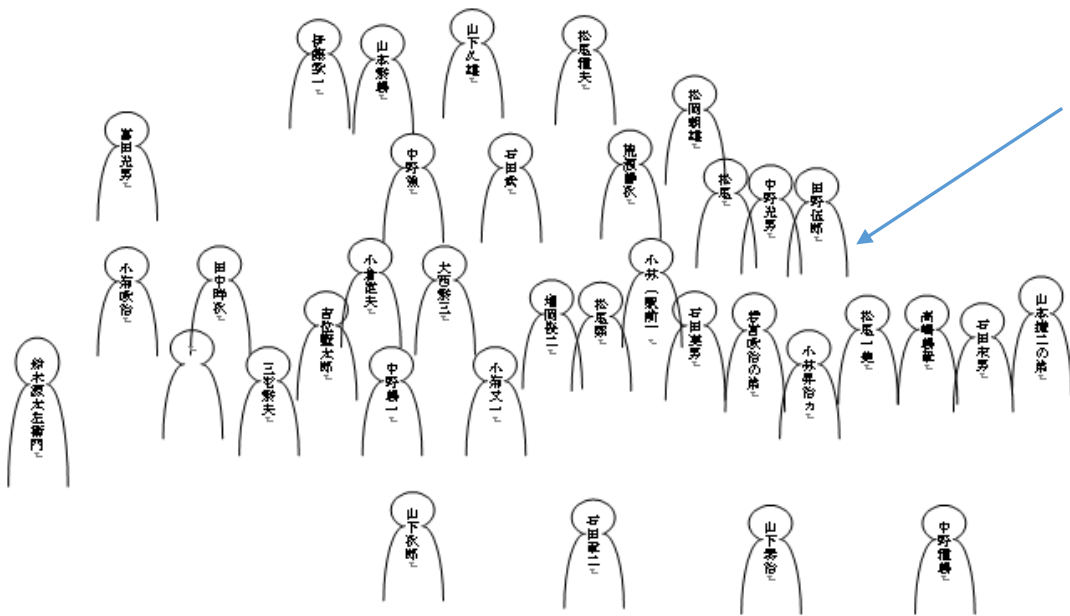
あ

←

あ



写真の人名表示



人の形イラストは図形で

写真の挿入

◇近世

このころには高室芝居（歌舞伎）はすでに地芝居（農民自身による素人芝居）の域を脱して巡行を生業としていました。が、芝居上演の記録が残っていない百年の空白期がありました。その空白期が過ぎた同

時期に寛政の改革が発令されますが、老中水野忠邦が罷免された翌々年には、高室芝居は買われて巡行に出かけています。

その盛況ぶりを表すかのように、当村の山野口大明神の手水鉢（享和二年・一八〇二・大歳神社の狛犬（文政十一年・一八二八）等々に座名・役者名が刻まれています。狛犬には当村の役者だけでなく大坂等の役者名も刻まれています。

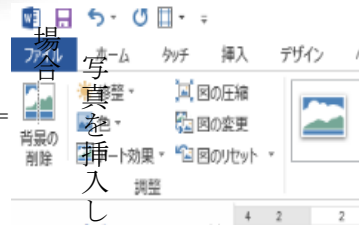
大坂の役者のひとり「曾我曹家五郎（明治二十五年（一八九二）歌舞伎役者、中村珊さん）及び喜劇作家として活躍」も、二十二年、三歳のころ中村珊之助を名乗って播磨高室村の嵐三郎で「本当の役者修業」をおこなったとあります。



《大歳神社の狛犬》

外周

背面



◇写真の挿入

写真の挿入した場合文字と写真の間が狭くなった

- ⇐ 挿入した写真をクリック
- ⇐ 図ツール
- ⇐ 文字列の折り返し
- ⇐ 外周を選ぶ

※写真の上に文字を入れる場合は、背面を選び

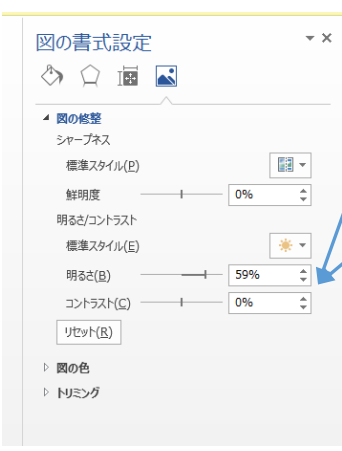
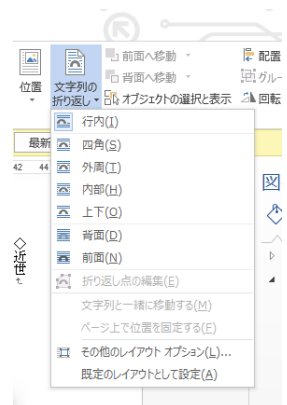
写真と文字のバランスをとる

図の書式設定

⇐ 一番右を選ぶ…山の図

⇐ 図の修正

⇐ 明るさ・コントラストで調整

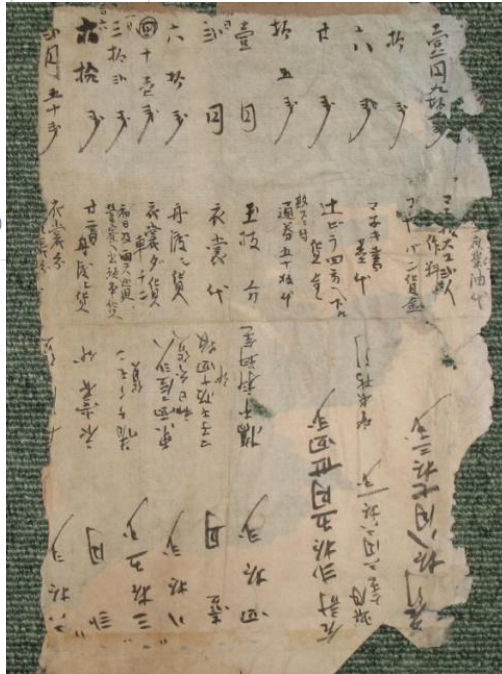


文字の方向



文字列の方向

- 横書き
- 縦書き
- 右へ 90 度回転
- 左へ 90 度回転
- 横書き (日本語文字を左へ 90 度回転)



◇文字の方向

①挿入

図形

テキストボックスを選ぶ

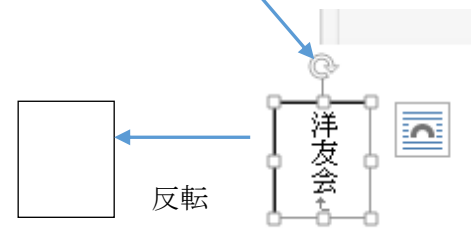
テキストボックスの先端に回転ハンドルマークがある

マークを任意の方向に (縦・横・反転等) する

②挿入

テキスト

テキストボックスを選ぶ



②木戸札金額・枚数書き上げ

夜業油代	一円九十口銭	大工二人	作料	十銭	コヤパン賃銀	マネキ書	墨代	廿ビラ四方へ下々	賃金	通券五十枚代	玉板分	一円	二円	六十銭	舟渡し賃	衣装駄賃	車賃	□一丁	三十二銭	□六	六十銭	二十二日	舟渡し賃	衣装分	二円五十銭
------	--------	------	----	----	--------	------	----	----------	----	--------	-----	----	----	-----	------	------	----	-----	------	----	-----	------	------	-----	-------

六十銭	舟渡し賃
二円	衣装代
三十五銭	請いもん賃
初日分賃	
一円	マネキ板十四枚代
合計	二十五円三十四銭
此内金三円六十一銭	座長持ち引き
差し引き	
	十八円七十三銭

六十銭	舟渡し賃
二円	衣裳代
三十五銭	請いもん賃
八十銭	東西屋二人
—	初日分賃
一円	マネギ板十四枚代
合計	
二十五円三十四銭	
此内金三円六十一銭	座長持ち引き
差し引き	
十八円七十三銭	

文責：伊藤 嘉明 20161116